第５次レッドデータブック：
絶滅のおそれのある日本の野生生物

The 5th Red Databook, Threatened wildlife of Japan

ミカワサンショウウオ

Hynobius mikawaensis Matsui, Misawa, Nishikawa et Shimada, 2017

島田知彦（愛知教育大学）・松井正文（京都大学）

絶滅のおそれのある野生生物の選定・評価検討会　爬虫類・両生類分科会

環境省 編

令和８（２０２６）年３月

特に文献内で別途指定がない限り、この文献はクリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンスの下に提供されています。

https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja

種毎の解説を引用する場合には以下のように記述してください。

引用表示：島田知彦・松井正文，2026．ミカワサンショウウオ．環境省（編）第５次レッドデータブック：絶滅のおそれのある日本の野生生物，pp. 332-337．

Citation: Shimada, T. and M. Matsui, 2026. *Hynobius mikawaensis* Matsui, Misawa, Nishikawa et Shimada, 2017. *In*: Ministry of the Environment, Japan (ed.), *The 5th Red Databook, Threatened wildlife of Japan*, pp. 332-337.

有尾目 Caudata　サンショウウオ科 Hynobiidae　　日本固有

ミカワサンショウウオ

***Hynobius mikawaensis* Matsui, Misawa, Nishikawa et Shimada, 2017**

カテゴリー判定結果　絶滅危惧ⅠA類（CR）　B2ab

基準 A:　―	基準 B:　CR	基準 C:　―	基準 D:　―	基準 E:　―

B2．生息地面積が 10 km²未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。

a) 生息地が過度に分断されているか、ただ 1 か所の地点に限定されている。

【過度に分断】

生息地は大きく 2 地域に分断されており、その間の地域には集落や大規模な造成地等が存在するため、2 地域間の交流は困難な状態にある。両地点あわせてこれまでに 25 の産卵地が見つかっているが、それらはそれぞれ別の谷に位置しており、各産卵地の間を日常的に個体が行き来する状況にはなく、下位個体群として認識される。生息地の沢はほぼ同じ水系に属しているため、人の手が入らない状態であれば沢間の個体の往来は比較的容易であったと推測されるが、現在では多くの沢において下流部は人家や耕作地、道路等の開発によって本種の生息や移動に適さない状態となっており、尾根筋を超えた移動も頻繁には起こらないと推測されることから、下位個体群間の行き来が困難な状況が現出している可能性が高い。卵嚢対数から推測される各下位個体群の規模は、大きくとも 100 個体程度と推測され、数個体分の痕跡しか確認できないようなごく小規模なものも存在する。以上から、本種では大部分の個体が比較的隔離された小さな下位個体群に見られると言ってよい状況にある。

b) 出現範囲、生息地面積、生息地の質、生息地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。

【判断理由】

生息地の多くは人工林にあり、その多くが私有地でもあるため、潜在的に伐採や造成の可能性を有している。生息地域内には農園や伐採地、保養地などが存在しており、これまでもそうした土地の造成に伴って多くの生息地点が消失してきた可能性が高い。個別の対策を取らなければ今後もそのような土地利用に伴う生息地の消失が続くことが懸念される。

評価分科会：　爬虫類・両生類分科会

概要

本種はこれまでに愛知県東部の特定の地域を流れる沢沿いの湿地からしか見つかっておらず、推定される生息範囲はごく小さい。繁殖集団の中には 100 個体程度の生息が推定される比較的大規模なものもあるが、多くはごく小規模な集団として存在する。人工林に点在する各産卵地は、人為的な環境改変に伴って分断されており、各集団が存続するための基盤は脆弱であると言わざるを得ない。また、飼育、販売目的の採集圧や、外来種アラ

イグマによる捕食、シカの食害による繁殖地周辺の林床植生（ササ）の減少など、現在は表面化していないものの、今後生じ得る懸念もいくつか考えられ、そうした偶発的な環境変化を引き金として種の絶滅に陥ってしまう危険性は高いと考えられる。

基礎情報

【形態】

止水性小型サンショウウオ類の 1 種。成体の頭胴長は雌雄とも 50～61 mm 程度。背面は一様なオリーブ色だが、頭部前半部と四肢には銀白色の細点を有する。腹面は背面より明るく、オスで喉部分が白色の婚姻色に覆われる以外は一様な色彩。卵嚢は紐形かつコイル状で、孵化直前の長さは 217～244 mm、幅 11.5～12 mm 程度。卵径は 3.1～4.8 mm 程度。一腹卵数は 19～56 個で 1 対 2 個の卵嚢に包まれる。分子遺伝学的には同じ止水性のクロサンショウウオ及びホクリクサンショウウオと近縁であり、特に後者とは形態的特徴も似るが、外部形態の比率等の違いがあり、別種レベルの分化が認められる。

【生活史】

繁殖期は 3 月から 5 月に及ぶが、最盛期は 4 月中旬から下旬。産卵場所は小渓流の源流部やそれに隣接する泥湿地で、泥の中に沈んだ木の枝や葉に産卵されることが多いが、ある程度流れのあるオープンスペースに産卵することもある。繁殖期の水温は 6.3℃～10.7℃。春先に越冬幼生が確認されることがあるが、多くの個体は当年で変態すると見られる。

【生息環境】

丘陵地（標高 500～700 m 程度）の沢の源流部に位置する泥質の湿地を産卵場所とする。既知の産卵場所の周囲はいずれも人工林（スギ植林地及び針広混交林）または竹林に囲まれ、林床はササに覆われることが多く、繁殖期以外の時期にはそうした林床で暮らしていると考えられる。

生息環境区分：	【陸域_中標高地】森林，湿地・湿原・細流
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

愛知県東部（新城市、岡崎市、豊田市）の標高 500～700 m 程度の丘陵地に局在する。本種はミトコンドリア DNA の塩基配列に基づいた解析では北陸地方に生息するホクリクサンショウウオ等との類縁関係が指摘されていることから、かつては中部地方に広く生息していた祖先種が分布を縮小し、愛知県東部に遺存的に残存した集団であると考えられている（Matsui et al., 2017）。ただし、本欄で対象としている明治時代以降で明確に絶滅した集団は確認されていない。2017 年に新種記載されてから分布域に大きな変化はない。

現在の生息状況

【分布域の現況】

愛知県内においては、現在知られている産地以外にも本種の生息が疑われる過去の記録があるが、いずれも標本や写真記録を欠くため正確な種同定ができない。

【生息地の現況】

生息地の多くは人工林を流れる渓流の源流部湿地にあり、林床にはササが密生してい

る。生息地周辺では局地的な人工林の伐採がしばしばみられ、部分的な個体群の消滅を招く可能性がある。また、過去には道路の建設や土地の造成で多くの集団が失われてきた可能性が高い。

【個体数の現況】

2023 年現在で 25 地点の産卵地が知られているが、そのうち 9 地点は、1～数対程度の卵嚢が発見されたのみで、ごく小規模なものである。一方、40 対以上の卵嚢が確認できる比較的規模の大きい産地は 2 地点あり、その他は 5～20 対程度の卵嚢が確認できる中程度の産卵地である。各地点で確認された卵嚢数の最大値を単純に合計すると 250 対程度となる。

存続を脅かす要因

本種の生息地の多くは人工林に点在しており、伐採される可能性を潜在的にはらんだ状態にある。現在生息地周辺では大規模な皆伐は行われていないが、局地的な伐採はしばしばみられ、そのことが部分的な個体群の消滅を招く可能性がある。また、過去には道路の建設や土地の造成で多くの集団が失われてきた可能性が高く、今後もそうした環境改変の影響で集団が縮小することも考えられる。

産卵地の 1 地点においては外来種であるアライグマの出現が確認されており、捕食圧による密度の低下も懸念される。また、本種の産卵地の多くでは、その周囲の林床にササの密生が見られるが、近隣の地域ではシカの増殖によって林床のササの衰退が問題となっている。もしこの地域でもシカの個体群密度が上昇して林床のササ帯が消滅した場合、本種の存続に大きな影響が現れる可能性がある。

現状では本種の違法採集や販売の事例は確認されていないが、小型サンショウウオ類は飼育愛好家も多く、他種では販売目的と思われる大規模な採集の事例もあるため、本種でも十分注意する必要がある。

要因の区分：	（過去）	森林伐採，湿地開発，土地造成，交通インフラ建設，捕獲・狩猟/園芸採取，捕食（外来種による），遷移進行・植生変化/自然遷移，分布・産地局限
	（現在）	森林伐採，湿地開発，土地造成，交通インフラ建設，捕獲・狩猟/園芸採取，捕食（外来種による），遷移進行・植生変化/自然遷移，分布・産地局限

特記事項

特になし。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第４次 2020：	ミカワサンショウウオ	*Hynobius mikawaensis*	CR

第４次 2019：	ミカワサンショウウオ	*Hynobius mikawaensis*	CR
第４次 2018：	ミカワサンショウウオ	*Hynobius mikawaensis*	CR
第４次 2017：	—	—	—
第４次 2015：	—	—	—
第４次：	—	—	—
第３次：	—	—	—
第２次：	—	—	—
第１次：	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和６年度末時点）

【愛知県】絶滅危惧ⅠA 類(CR)

保護に係る法令指定状況（令和７年度末時点）

都道府県条例指定種【愛知県】

参考文献

- Matsui, M., Misawa, Y., Nishikawa, K., and Shimada, T., 2017. A new species of lentic breeding salamander (Amphibia, Caudata) from Central Japan. Current Herpetology, 36(2): 116-126.
- 大竹勝・島田知彦．2016．両生類．豊田市生物調査報告書作成委員会（編），豊田市生物調査報告書分冊その 3，pp. 187-209.
- 大竹勝．2009．サンショウウオの一種．愛知県環境調査センター（編），愛知県の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブックあいち 2009 動物編，pp. 187.
- 島田知彦，2020．ミカワサンショウウオの産卵地で観察されたアライグマによるアズマヒキガエルの捕食例．爬虫両棲類学会報，2020(1): 54‐56.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Hynobius mikawaensis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Hynobius mikawaensis* is listed as CR under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 10 km², and estimate indicating at least two of a-c:

a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.

b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence

(ii) area of occupancy

(iii) area, extent and/or quality of habitat (iv) number of locations or subpopulations (v) number of mature individuals	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】Forest, Wetland/Marsh/Stream
Threat types:	Logging and wood harvesting, Wetland development, Land development, Transportation infrastructure construction, Hunting and collecting animals/Gathering plants, Predation (by alien species), Successional progression/Vegetation change/Natural succession, Limited distribution
Law designation status for conservation	Prefectural Ordinance-Designated Species【Aichi】.





執筆者:	島田知彦（愛知教育大学）・松井正文（京都大学）
Author:	Tomohiko Shimada and Masafumi Matsui

公表年月：2026 年 3 月